

病気の子どもに関する知識提供前後における ボランティア参加意欲の変化の検討

○岩野麗歌・金平希

(福山大学大学院人間科学研究科・福山大学人間文化学部心理学科)

本研究の目的

白血病や心疾患等を抱える病気の子どもは将来や治療、対人関係、学習に不安がある。こうした病気の子どもに対しては、大学生等によるボランティア支援が期待されている(檜木・山下, 2014)。先行研究では、支援行動やボランティア参加意欲の促進に、知識の提供が有効であると報告されている(瓜生原, 2018; 松村・鈴木, 2006)。しかし、大学生を対象に病気の子どもに関する知識提供を行い、ボランティア参加意欲の変化を検討した研究はみられない。そこで本研究では、病気の子どもに関する知識提供を行い、その前後の比較によって、介入群と統制群で大学生のボランティア参加意欲の変化について検討することを目的とした。また、ボランティア参加意欲に関与しうる要因に着目し、ボランティア参加意欲の向上に及ぼす影響を検討する。

方法

参加者および調査期間 クラウドソーシングサービス(Yahoo! Japan)に登録している大学生222名(介入群104名、統制群118名)を対象とした。内訳は、介入群(平均年齢20.66歳, $SD=1.76$), 統制群(平均年齢20.92歳, $SD=1.92$)であった。2024年7月に調査した。

調査内容 ①フェイスシート(年齢、性別、学科、罹患経験の有無、病気の家族・知人の有無、病気の子どもに対するボランティア知識・経験の有無), ②病気の子どもに関する知識15項目2件法, ③病気の子どもに対するボランティア参加意欲尺度13項目5件法、全般的なボランティア参加意欲0—10段階, ④病気の子どもに対する肯定的および否定的イメージ尺度23項目4件法, ⑤病気の子どもとの接触経験9項目2件法、経験による影響1項目4件法について調査した。

手続き まず、病気の子どもの定義を呈示した。次に、病気の子どもに関する知識や病気の子どもに対するボランティア参加意欲を尋ねた。その後、介入群では病気の子どもに関する知識を提供するチラシを提示し、統制群では知識提供のないチラシを提示した。再度、知識やボランティア参加意欲を尋ね、最後に、イメージやフェイスシート等に回答を求めた。

なお、病気の子どもに関するチラシ作成について、国立

特別支援教育総合研究所が発行する病気の子どもの理解を促す教員用パンフレットを参考に作成した(A4用紙1枚程度)。知識提供のないチラシは、知識提供のチラシと同様の書式や形式等に整え、ボランティア募集の一言のみを記載し、病気の子どもに関する知識は入れずに作成した。

結果

チラシによる知識提供群と統制群における知識提供前後のボランティア参加意欲の差を検討するため、事前のボランティア参加意欲を統制した共分散分析を行った。その結果、群の主効果が有意となった($F(1, 219)=4.05, p=.05, \eta_p^2=.02$)。多重比較(Holm法)の結果、介入群が統制群よりも病気の子どもに対するボランティア参加意欲は有意に高かった($t(219)=2.01, p_{adj}=.05$)。

次に、介入群におけるボランティア参加意欲の向上に関連する要因を検討するため、目的変数をボランティア参加意欲の増加量とし、説明変数を病気の子どもに対するイメージや病気の子どもとの接触経験、経験による影響、性別、罹患経験の有無、病気の家族の有無、病気の知人の有無、ボランティア知識の有無、ボランティア経験の有無とする重回帰分析を行った。その結果、罹患経験の有無のみ有意であった($R^2=.11$; 罹患経験の有無: $b=2.58, SE=1.29, \beta=.22, t(84)=1.99, p=.05$)。

考察

本研究の結果から、チラシ1枚という簡易的な知識提供であっても介入群では提供後にボランティア参加意欲が向上していた。一方、統制群ではボランティア参加意欲の向上はみられなかった。つまり、先行研究同様、病気の子どもに関する知識提供は、ボランティア参加意欲の向上に効果があると考えられる。また、病気の子どもに対するボランティア参加意欲の向上には罹患経験の有無のみ影響を及ぼしていた。罹患経験のある者は、自身が受けたサポートを病気の子どもや他の人に返したい、役に立ちたい思いがあり、知識提供によってボランティア参加意欲がより高まったと思われる(竹鼻・朝倉, 2018)。

展望

今後は、実際に大学生のボランティア活動を促進するため、病気の子どもに関する知識提供と支援行動との関係について検討が必要だろう。